

2017年9月24日 <聖霊降臨後第16主日 礼拝 > 飯川 雅孝 牧師

招詞： ロマ書5章1－4節 聖書： イザヤ書53章4－12節

説教 『広島被爆時の市長：栗屋仙吉とは』

毎夏、終戦記念日を覚えて説教をしております。原爆投下の日、広島松井、長崎の田上両市長のメッセージは原爆への抗議と世界の平和を発信する神の預言者の訴えそのものでありましょう。今年、わたしは広島被爆時の市長が栗屋仙吉という極めて真摯なクリスチャンであることを知りました。彼は広島公舎で中学生の三男と三歳のお孫さんを抱いたまま、白骨で発見されました。その時は近くに住んでいた夫人も駆けつけましたが一か月後に死亡。東京から駆けつけた当時高女の次女も介護による原爆症のため3ヶ月後に死亡したという痛ましい報告があります。両市長のメッセージは被爆時の市長栗屋仙吉の無言の訴えが原点にあるような気がします。

栗屋は文武の両方のタラントに恵まれ、キャリア官僚の道に入りますが、柔道は五段の腕前でした。敬虔なクリスチャンの母親のおかげで若き頃から神に導かれます。すでに牧師の紹介で中学卒業の頃から聖書に親しみ、内村鑑三の『聖書之研究』を読んでいました。内村の弟子への信仰の継承は真摯そのものでした。「真実に道を伝える者は聞く者の真実を要求する」と矢内原忠雄は語っておりますが、栗屋もその一人でした。彼の遺稿『私にうつった内村先生の面影』によれば、自分は今日まで内村先生の非情なご指導に預かり、先生の教えに影響せられた。・・・自分の霊魂はほとんど内村先生によって育てられて来た。無意識の間に先生に影響せられていた。言葉では言い尽くすことのできない、と語っています。グッド・クリスチャンたれ。これは彼が直接言われた言葉では有りません。彼の心はその種を捨ったのであります。大学生のころ、ある親しい友だちが内村鑑三先生のもとにいったとき、内村は「多くの教師は、自分のところに近づいてくる若者に対して、ただ頭をなでて〈いい子だ、いい子だ〉というような態度をとるのがふつうであるが、自分はそういうことを君に向かつては言わない。君は一生を通してグッド・クリスチャンであろうとする心がけで進まねばならん」と注意せられたことを聞いて、自分に言われたこととして受け止めました。栗屋の人生は神に従って行こうとするところからスタートしました。

内村の文章で、ロマ書5章3、4節の「艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず」というパウロのことばの解説が栗屋の人生の戦いの中で息づいています。

「われわれが困難に遭遇し自己の力の足らざるを知らしめられ、自分の力ではどうにもならんという謙遜なる心持を深く深く徹底せしめられ、すなわち建築師が地の底にまで掘り下げそこに動かざる岩盤を見だしその上に建築をなすごとく、われらも動かざる岩盤なる神さまを見出しその上に人生観を打ち建てて、初めてほんとうの希望が生じてくるといったよう

に教えておられたたと思うが、艱難悲境に置かれるごとに私はこの教えを思い出すのである。」と語っております。キャリア官僚としての恵まれた道であるのに、彼の生き方はこの世に対抗するため困難な歩みをたどりました。キャリア官僚は2－3年で移動させられますが、広島、北海道、高知県、兵庫、大阪などの県の要職につきます。しかし、特筆すべきは能吏としてだけでなく、利害や政治的紛争の絡む難問の中で、内村が自分の信仰として、栗屋に与えたロマ書の解説通りに力を与えているのが感じられる、だから栗屋は「無意識の間に内村先生に影響せられていることは、ほとんど言い尽くすことのできないほどであります。」と述べているのです。

その戦いの主なるものと言えば、昭和4年高知県書記官警察部長時代には、漁業史に残る機船底引網漁業全廃闘争が起こり、栗屋は運動リーダーと話し合いを重ね収めます。そして、あの有名な昭和8年大阪府警察部長の時、全国的にも軍と警察の争いとして有名になった「ゴーストストップ事件」(天六事件)であります。大阪の天六市電交差点で、信号を無視して道路を横断しようとした第4師団の一等兵を曾根崎署の巡査がとがめたが、兵士は「憲兵ならともかく、巡査の指示は受けない」と反抗します。巡査は派出所に連行すると乱闘になった。陸軍は「軍服着用である以上、軍人として扱うべき」「陛下の軍隊を侮辱するのは不敬」と硬化します。それに対して大阪府警の栗屋は「公務外の外出であれば交通規則に従うべき」「警察官も陛下の警察官」と反発して、大抗争になります。5か月後、兵庫県知事の仲裁で解決されますが、当時の軍の横暴ぶりを示すエピソードであると読売新聞は報道しております。この時、栗屋は筋を立て、軍部に一步も譲らなかった。内村の影響を受けて神と共に戦った生き方が、面目躍如として示されております。しかし、このことはその後軍部ににらまれ、彼のキャリアにはマイナスとなりました。でもそれ以上にグッド・クリスチャンとしての生き方が証明されたのであります。官僚としては最後に大臣に次ぐ役職の馬政局長官に付きませんが、軍馬を養成する戦争体制への加担の責任者としての役目は彼には当然望むことではなく、48歳にして依願免官します。内村は非戦論を唱えていましたし、栗屋と同じ内村鑑三の弟子であり、伝道者であった、友人の金澤常雄は栗屋の死後12年、戦争への反省も大方の意見が固まった頃、彼の追想録にその辞任はクリスチャンとしての名誉であったと追悼しております。しかし、まもなく広島出身だった当時の大蔵大臣の賀屋興宣(かや おきのり)の懇請により、昭和18年広島市長に就任します。惜しむらくは2年後の8月6日原爆により市長官舎で被爆し命を落とします。享年51歳でした。

彼の清らかな生涯を栗屋の家庭人としての生活を隅々まで知る次女康子は東京から駆けつけ、母親の介護をしながら、死の直後に父親への手記を残しております。その時彼女は19歳でしたが、10年前からゴーストストップ事件で苦闘する父親、馬政局長官時代の苦しみ、広

島市長としての政治の世界での権謀術数入り乱れたな中での苦杯は十代の娘としても感じていたのでしょう。「父以上に清い生涯を送った人は私には思い当たらない、・・・あれだけ社会の汚い波の中をおよぎつつ、清らかな正しきで押し通した人、父は偉い、わたしは父が誇らしい、昔から誇らしかった。しかし今なくなって見ていっそう誇らしい。・・・しかし、国家にとっても父の死はあまりにも惜しい。父のように正しき人を国家はなぜもっと重く用いたのか。国のためにも悲しむ。わたしは父の政治が日本をよくすることを確信していたのだ。」その康子も父の死の三カ月後に原爆症で死にます。イエスの言う幸いな人、心の清い人、神を見た人。平和を実現する人、神の子と呼ばれた人。義のために迫害された人、天の国に行った人、自分の父親がそのように見えたのでしょう。栗屋の生涯がそれを伝えています。

それでは栗屋の死の意味はどのように考えたらよいのでしょうか。

先ほど紹介した金澤常雄の追悼文は、間もなく天に召される病床を押して、その意味を書いております。その彼もこれを書き終えると3ヶ月後に天に召されました。

イザヤ書53章の主の僕、「祖国の人柱として」栗屋仙吉。

君は若い頃から鍛えられた行政的才能が評価され、時局の重要さと任務が容易でないことを予期しつつ祖国のために最後の御奉公をすることが御旨と信じて赴任された。併し誰か予期したでしょうか。あのような惨たる運命が君の前途に待っていようとは。神の御意は計り知れない。若き日より主イエスキリストにより、父たる真の神を信じ、全生涯を御手に委ねて、ただ待望の生涯を一貫された。しかし、御意に従ったことは遂に原爆による死であった。余りにも残酷な神の愛ではありませんか。わたしは君の生涯と死を思うとイザヤ書53章の「主の僕」の生涯を思わざるを得ない。主は彼に従順に従った義しき僕に対して「彼を砕くことを喜びて彼をなやまし給えり」私訳10節）と書かれている。・・・イエスの真の僕である栗屋君もまたキリストの苦難に参加せしめられ祖国の緋の如き罪を負わされて祖国が救われるために贖いの羊とせられたのであるとわたしは信じます。しかも、それは実に深刻であります。君の他に家族も逝かれた。・・・わたしは沈黙してただ神を仰ぐ。そしてすでに義の冠を与えられて主の御許にて明星のように輝いてわたしたちを天国で待っている栗屋君と4人のかたがたを思い、神の恩恵のゆたかなるよう切に祈るのである。

この金澤の追悼文も次女康子の追悼文も人生の最後に栗屋の思い出を語る遺言であるだけにそれだけ、重く感じる次第です。

わたしたちも、原爆とはこのような悲惨を人々に与えるものであり、その犠牲となった広島市長の栗屋仙吉氏の信仰とその死を覚えたいと思います。